

| | |
|--|--------------------------------|
| 第 10-14 回 (2015.12.15,22 2016.1.5,12,19) | 総合演習 北村由美准教授 (附属図書館) |
| <p>■ 第 10 回：12 月 15 日(火)</p> <p>場 所： 学術情報メディアセンター南館 203 参加者： 受講者 18 名 演習補助者 4 名 配布資料： 講義スライド (グループ発表とレポートに向けて・グループワーク課題 RW 登録方法について) / キーワードマップ用紙/ 調査テーマ記入用紙</p> <p>➤ 講義 (40 分) 「総合演習 グループ発表とレポートに向けて」</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 総合演習の目的 <p>これまでの講義や演習で学習した内容、習得した技術を総動員してテーマを設定し、発表とレポート執筆を行うこと。</p> <p>発表内容：「21 世紀の重要な問題」</p> <p>発表構成：問題定義・先行研究レビュー・新しい研究テーマの提示</p> ● 具体的な資料活用法 <p>日々の情報収集 先行研究レビュー インタビューの事前準備 論文 想像力 一見関係ない事柄に対する興味 等。</p> ● 論文・レポートを執筆するために <p>参照すべき資料は、論文・レポート全体のどの部分を執筆するかによって異なる。 参考資料が必要となるのは問題の概要部分。また本論のための一般書・専門書・論文を探すためにも必要となる。</p> <p>グループ発表のポイントは以下の通り</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 関連資料を十分網羅し、読み込んでいるか 2. 関連資料のポイントを的確にとらえているか 3. 各グループならではの着眼点で研究テーマを提示しているか 4. 研究テーマ案と文献レビューの関連が明らかか 5. 推敲・校正・再確認 <p>レポートを書くときのポイントは以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. グループ発表の内容に沿って、自分の言葉で 2000 字にまとめる 7. 引用と文献リストの書式をきちっとおさえる ● 引用、参照の意味とは <p>自分の意見や発表の根拠を明示する、自分の意見と他人の意見を区別するため。 その論文を読んだ次の人に、研究内容を渡すために必要となる。</p> ● 著作権とは <p>死後 50 年保護される知的財産権の一つ。 著作権の有無にかかわらず、学術の世界では他人の文章やアイデアを参照する際には、ルールに基づいて明示しなければならない。</p> ● テーマ設定のためのブレインストーミングに向けて <p>テーマ設定にはまず問題意識を言語化してキーワードを選択する必要がある。下位概念になるほど問題が細分化され、文献の量が少なくなる。文献が見つからないときは一段階層を上げてみるとよい。逆に範囲が広すぎる場合は階層を下げる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 言語化・構造化に役立つツール <p style="text-align: center;">NDL サーチ / JST シソーラス / JST シソーラスマップ / Webcat Plus / 新書マップ</p> | |

➤ 演習 (50分)

- グループ発表・課題について説明 (5分)
- グループワーク (35分)
 - ・ グループで話し合っ、調査テーマを決定する
- RefWorks アカウント登録の説明 (10分)

➤ 課題

キーワードマップの作成、調査テーマに関する文献調査など。

■ 第 11 回 : 12 月 22 日(火)

場 所 : 学術情報メディアセンター南館 203

参加者 : 受講者 17 名 演習補助者 6 名

配布資料 : 講義スライド (RefWorks の使い方) / 課題

➤ 講義 (30分)

- RefWorks 活用法
 - ・ 各種論文データベース (CiNii Articles / Web of Science / Scopus) から RefWorks に論文情報を取り込む
 - ・ 手入力で新規に書誌情報のレコードを作成する
 - ・ コメント機能を使って論文情報に自分のメモを付記する
 - ・ RefShare を使って集積した文献リストを共有する
- RefWorks のアカウントについては、第 10 回 (12 月 15 日) の講義の際に登録を行った。
- 学習支援サービス PandA (情報環境機構提供) を利用した課題提出、および作成資料の共有方法の解説。

➤ 演習 (60分)

- グループワーク (40分)
 - ・ 教員と補助者、学習サポートデスクのスタッフが発表準備のサポートを行った。
 - ・ あらかじめ各班に担当補助者を割り振り、補助者は担当班のサポートを重点的に行った。
- グループごとに発表計画を説明 (20分)
 - ・ グループごとに発表計画を 1 分程度で説明した。
 - ・ 北村准教授から足りない視点や方向性についてフィードバックを得た。

➤ 課題

RefWorks での文献管理など。

■ 第 12 回 : 1 月 5 日(火)

場 所 : 附属図書館 3 階 共同研究室 5、附属図書館 1 階ラーニング・コモンズ

参加者 : 受講者 18 名、北村准教授、演習補助者ほか 4 名

配布資料 : 講義スライド (発表資料・最終レポートについて)

➤ 講義 (5分)

- 発表資料・最終レポート・アンケートについて
 - ・ 提出方法や締め切りなどの説明

➤ 演習 (85分)

- グループワーク
 - ・ 教員と補助者、学習サポートデスクのスタッフが発表準備のサポートを行った。

(記録 : 山口琴衣)

■総合演習発表概要

- ・「21 世紀の重要な問題」に関してグループでテーマを設定し、調査発表を行う。
- ・各班、発表時間 20 分 + 質疑応答（約 5 分）で発表を行う。
- ・発表者は「自己振り返りシート」に記入し提出する。
- ・他の履修者は、各班の発表について「発表評価シート」に記入し提出する。
- ・「発表評価シート」は各回で回収し、第 14 回の最後に得点で 1 位と 2 位の班を発表する。

■ 第 13 回：1 月 12 日(火)

場 所：附属図書館 3 階 共同研究室 5

出席者：履修者 18 名、北村准教授、カール・ベッカー教授、演習補助者ほか 9 名

配布資料：発表レジュメ（1 班、3 班、5 班分）、発表評価シート、自己振り返りシート

14:50-15:10 3 班発表（発表者 3 名）

タイトル「遺伝子組換え食品の安全評価と選択」

遺伝子組換え食品の国内外における表示基準や安全基準の違い、さらに機関による簡潔すぎるあるいは難しすぎる説明が市民の混乱と不安を招いていることが問題提起された。そして一般人がとらえるいわゆる「主観的リスク」を減らすために、消費者は基礎知識を身につけ、研究者は分かりやすい説明を提示していく必要性が提案された。

出席者からは、主観的リスクについて詳しい説明が求められた。ベッカー教授からは、人体リスク（発がん性など）と自然環境へのリスクの両方について検討したのか、という質問が出された。

15:20-15:45 5 班発表（発表者 3 名）

タイトル「学力格差：現状と、日本や海外での取り組みについて」

子どもの学力は個人の勉強時間のみならず、親の学歴や収入などの環境が影響しているとして、学力格差を解消するには奨学金や支援金などの経済的援助と、生徒のレベルにあわせた教育が必要であることが提起された。またフィンランドの事例と比較しながら、貧困や教育格差の解消には、国レベルの政策やサポートが必要であることが示された。

北村准教授からは、スライド内のグラフやデータが小さく見にくいこと、さらに、データはバイアスがかかっている場合もあるため、典拠を示すべきであることが指摘された。ベッカー教授からは、スライド 1 枚につき説明は 1 分程度が適切であること、日本とフィンランドを比較する場合、比較する側面を統一しておくべきであることが指摘された。

15:50-16:10 1 班発表（発表者 3 名）

タイトル「欧米における難民問題」

欧米に入ってくる難民について第二次大戦以降の歴史と、受入れる欧米諸国の国民感情もあって難民流入が抑制される傾向があることについて紹介された。また民間レベルでの支援活動は経済的にも精神的にも限界があり、今後は国や国際社会レベルでの受入れ体制の整備が必要であることが提起された。

出席者からは、スライド内にある難民への差別発言を取り上げたテレビの一場面の典拠について質問が出された。北村准教授からは難民の「同化」について質問があり、ここでは文化・人種のアイデンティティを保持しながら受入国で円滑に暮していくという意味であることが確認された。ベッカー教授からは、参考文献欄はスライド内で脚注を付けて対応させる、あるいは 50 音順・ABC 順などの記述方法があることが示された。

■ 第 14 回：1 月 19 日(火)

場 所：附属図書館 3 階 共同研究室 5

出席者：履修者 18 名、北村准教授、演習補助者ほか 8 名

配布資料：発表レジュメ（2 班、4 班、6 班分）、発表評価シート、自己振り返りシート

14:50-15:10 2 班発表（発表者 3 名）

タイトル「日本におけるムスリムの現状」

日本で生活するムスリムが、宗教に基づく生活様式などの特性により遭遇している困難と、非イスラム側のイスラム文化に対する理解の重要性について問題提起された。個人レベルでは「配慮すべき点がある」という意識を持つこと、行政レベルでは知識の普及、何ができて何ができないのかを検討していくといった対応が必要であることが提案された。

北村准教授からは今後の提案や研究の展望、日本だからこそできることについて質問が出された。

15:20-15:35 4 班発表（発表者 3 名）

タイトル「アメリカ優生学の歴史から現代の生殖医療の在り方を問う」

アメリカ合衆国における優生学受容の背景を紹介し、現代の生殖医療においては、出生前診断により人工中絶を行うことの裏に優生思想がはたらいている可能性が示唆された。そして社会的な議論や法整備が十分でなく、知識が行き渡っていない状況で個人に判断を委ねていることが問題であるとされた。

出席者からは、人工中絶の裏に優生思想がはたらいているという論理は飛躍しすぎではないかとの意見が出された。北村准教授からは、アメリカでの歴史と日本の事例とにギャップがある構成になっているとの指摘が出された。

15:40-16:05 6 班発表（発表者 3 名）

タイトル「地方の過疎化：現状と取り組み」

日本において地方の過疎化が 21 世紀の重要な問題となっている現状を紹介し、島根県隠岐諸島にある海士（あま）町では町長のリーダーシップにより、島の魅力の発信、企業誘致、人材育成などの取り組みを行っている事例が紹介された。今後は地方の魅力を引き出す方法の研究、さらには日本の経験を途上国に活かす可能性も示唆された。

出席者からは、海士町の取り組み A~C は発表者自身で分析・一般化したものかという質問と、なぜ海士町の取り組みを紹介したのかという質問が出された。

16:10-16:15

- ・履修者は、教育学研究科院生の研究に協力する形で、院生自身が作成したアンケートに回答した。
- ・1 班から 6 班すべての「発表評価シート」を集計し、得点で 1 位（6 班）と 2 位（3 班）を発表した。
- ・記入された「発表評価シート」を、各班へ配布した。
- ・事務連絡（最終レポート、アンケート、半年後のフォローアップアンケート等）

（記録：櫻井 待子）

□2015 年度の主な変更点

- 授業構成
 - ・ 昨年度は「参考」「総合演習」に分かれていた最終 5 回分を「総合演習」に統一し、グループ発表のための連続した授業であることを強調した。
 - ・ 昨年度第 11 回授業時に行った図書館実習、データベースの講義を他チームで担当してもらい、余裕がでた分をグループワークの時間とした。
 - ・ 第 12 回授業をほぼ全てグループワークの時間とした。
- 授業会場
 - ・ 第 10-11 回はメディアセンター203、第 12 回は附属図書館ラーニング・コモンズ、共同研究室 5、第 13-14 回は共同研究室 5 で行った。
- 発表
 - ・ 昨年度までは担当者が決めたテーマの中から選択してもらっていたが、今年度は「21 世紀の重要な課題について」という大きなテーマのみを与え、受講生に自由にテーマを設定してもらった。
 - ・ テーマ設定が難航した時のために、各班に「現代用語の基礎知識」を配布し、参照してもらうようにした。
 - ・ 発表評価シート（対他者）について、昨年度は A4 版両面で選択項目と自由記述項目があったが、今年度は A5 版片面で自由記述項目に絞り、無記名とした。
 - ・ 発表振り返りシート（対自分）について、昨年度は A5 版の白紙に自由に記入してもらったが、今年度は A4 版片面に項目を立てて、記入してもらった。
- 課題
 - ・ 第 10 回、第 11 回課題を、グループ発表に関わる内容に絞り、参考図書調査や外国語論文の検索を削除した。
 - ・ 全体的に課題文の文章量を減らし、簡潔に記述した。
 - ・ アンケートの提出を必須とし、最終レポートとあわせて、PandA の課題ツールを使って提出してもらった。
- データベースのアクセス数増加について
 - ・ 昨年度は JapanKnowledge や新聞 DB の同時アクセス数の増加を依頼したが、今年度は授業中にデータベースを用いる演習を行わなかったため、同時アクセス数の増加を行わなかった。
 - ・ データベースを用いる課題を課したが、受講生が少人数だったこともあり、同時アクセス数を増加しなくても、特に問題はなかった。

□ 感想・反省等

- 授業構成について
 - ・ 一貫してグループ発表にむけた授業構成としたことで、説明が行いやすくなった。
 - ・ 資料調査の入口で図書館実習を、IN/DB で各種データベースの説明を担当してもらったことで、時間的余裕ができ、授業内にグループワークの時間を多く設けることができた。
- 授業会場について
 - ・ メディアセンターでは、テーマ設定の際に備え付けの PC からインターネットを閲覧したり、ラーニング・コモンズや共同研究室ではグループで話しやすい形に机を動かしたりと、それぞれの場所の特性を活かすことができた。
 - ・ ラーニング・コモンズはテスト前で利用の多い時期でもあるので、参考調査掛の協力をあおぎ、事前に場所と机を確保しておく必要がある。

➤ 発表について

- ・ 自由にテーマを設定してもらっても、特に混乱はみられず、受講生たちは興味を持って、積極的に調査を進めていたように見受けられる。
- ・ 来年度も大きなテーマは「21 世紀の重要な問題」とし、今年度の各班のテーマを例示すると、受講生が発表をイメージしやすいという意見がでた。
- ・ テーマ設定の参考として「現代用語の基礎知識」を配布したが、「難民問題」など、その中で取り上げられている話題に複数のグループの関心が向いてしまう傾向があった。
- ・ 発表評価シートは項目が多いと、書くことに気をとられて、聞くことがおろそかになる恐れがあるので、今年度並みの分量でちょうどよかった。
- ・ 発表振り返りシートについて、授業中に書き切れず持ち帰る学生も多かったので、評価シートと同様 A5 版の分量でよい。
- ・ 発表評価シートは該当グループに返却し、受講生のフィードバックに活用してもらった。
- ・ 発表振り返りシートは回収し、教員や補助者のフィードバックおよび来年度以降の授業の参考資料とした。
- ・ 発表の目標は「先行研究をふまえた、新研究テーマの提案」だったが、先行研究の調査とそれに対する意見で終わっている発表があった。発表の最終目標をもう少し強調しておく必要があった。
- ・ 発表の構成を明確にするために、発表スライドを例示するのも一案である。
- ・ 第 11 回に受講生に発表計画を説明してもらったことで、教員や補助者が現状を把握し、軌道修正を促すことができた。ただし、説明時間を 1 分間としていたが、超過するグループが多く、授業時間を超過してしまったため、タイムスケジュールに余裕を持っておく方がよい。

➤ グループワークについて

- ・ 発表チームの構成を 1 グループ 3 名としたことで、グループワークにおいて皆が意見を述べやすかったようだった。受講生の人数が増えても、発表時間を減らすなどの工夫で、できる限り 1 グループ 3 名の構成を継続できるとよい。
- ・ 各班に配布したパソコン、ホワイトボード、A3 版白紙などが積極的に活用されていたので、来年度以降も参考調査掛に手配を依頼し、配布できるとよい。

➤ 課題について

- ・ 第 10 回、第 11 回課題ともすべて発表のための資料収集の課題としたことで、課題に必然性ができた。
- ・ 第 11 回課題の内容は資料の要約と RefWorks へのインポートに絞り、他のチームですで行っている所蔵情報等の記入は削ってもよいかもしれない。
- ・ 第 11 回課題を、PandA のリソースの班フォルダにアップするよう指示したが、班フォルダに受講生がアクセスできず、混乱を招いた。「グループリソースにアクセスまたは作成」という権限を有効にしておく必要があった。

➤ RefWorks について

- ・ RefWorks の動作が最も安定しているということで、FireFox を使用するよう案内してきたが、他のブラウザでも特に問題はないようなので、来年度以降はブラウザの制限をなくす方向で検討したい。
- ・ RefWorks では日本人名は五十音順で並び替えができないこと、RefWorks の SIST02 スタイルでは、ウェブの URL やアクセス日時が表示されないことが受講者の質問より分かった。参考文献リストの課題では注意が必要である。

➤ PandA について

- ・ PandA のリソースを発表資料の共有に活用していたグループがあった。受講生の中には PandA を課題提出用と捉え、提出物以外をアップしてはいけないと思っていたようなので、課題提出以外でも積極的に活用してもらおうよう案内できるとよい。

➤ 参考文献について

- ・ 参考文献リストの作成について、受講生からスタイルによる表記の違いについて質問があった。ベッカー先生よりご指摘いただいた、リストの順序に決まりがあることなども含め、参考文献リストについてより詳しい情報も伝えられるとよい。

➤ アンケートについて

- ・ アンケートを最終レポートとあわせて必須提出としたことで、最終回まで残った受講生全員から回答を得ることができた。
- ・ 後日 word 提出としたことで、自由記述欄にも多くの意見を記入してもらうことができた。
- ・ 有用だと思ったツールについて、「新聞 DB」が最も多く、次いで「CiNiiArticles」「RefWorks」が多かった。
- ・ グループワークについて、「自分とは全く異なる視点や意見に出会えて刺激になった」「話しながら作業するとアイデアが発展的にわいてくる」といった意見と「全員それぞれ自分の意見を持っていて、それをまとめるのは大変だと感じた」「情報のすり合わせが非常に大変だった。時間内にプレゼンを終わらせるためには、グループ内で情報を絶えず整理しておかねばならない」といった意見があり、グループワークならではの利点や難点を感じたようだった。
- ・ 授業時間外でグループで話し合った時間について、「2-4 時間」が最も多く、用いた方法は「ライン」が最も多く、次いで「実際に会った」が多かった。
- ・ 情報共有に用いたツールとして、Microsoft が提供している OneDrive というオンラインストレージを挙げているグループがあった。Microsoft Office ファイルを複数人で共有、同時に編集などができる。発表スライドを PowerPoint と指定していたので、利用したようだった。
- ・ 受講理由について、「図書館の利用法を知りたかったから」という項目が第 3 位であった。今年度の授業名に「大学図書館」という語を入れたことで、図書館に興味を持つ学生が受講したのではないかと思われる。
- ・ 授業のツイッターについて「たまに見ていた」が 5 名、「よく見ていた」が 1 名という結果となり、一定の役割を持っていることが分かった。
- ・ 授業のお知らせについて、どのようなツールだと見るかという質問については、「KULASIS」が最も多く、次いで「メール」が多かった。
- ・ (アンケート一般に関して) 理解度および有用度について、「理解できなかった」に対して「よく理解できた」と文言に偏りがある点、有用度は授業後に測るものなので、「役に立った」という過去形に違和感がある点がチームの間で問題点として共有された。

(文責：小松原 記子)